玉川の男神山女神山伝説

昔、延暦年間（七八二～八〇六）の二月のこと、玉川村に甚内という木樵がいた。この甚内は、阿仁から妻とともに玉川に住むようになった者だった。夫婦仲も良く真面目に良く働くので、玉川の人々は甚内、甚内と親しんでいた。



玉川男神山女神山（二神山縁起）

冬も終わりに近く、雪は一丈余もあるが、早春らしく良く晴れ渡った美しい日であった。大きなブナを伐り倒し心地よく汗を流したち、ついうとうととまどろんだ。そのおりに夢の中に白髪の尊い翁と姥が現れ、甚内に呼び掛けた。

「これ甚内よ！我等は養老二年の昔、この山に天降りし伊弉諾、伊弉冉尊なり、時未だ到らずして世に出でず、今至福の時に遭いて現れ、天下安穏五穀豊饒のしるしを見せん！」甚内はそのお告げを聞いてはっと夢からさめた。

その夜、不思議なことにカツラの木が声を放ち、「我に神楽を手向けよ。いざや神遊びせん…」と言ったかと思うと、高いカツラの梢から一つがいの白鶏が光明の珠をくわえて、光かがやきながら、男神女神の頂きへ飛び去った。甚内は急ぎ里へおりて、清らかなお湯を捧げ、八人の乙女と五人の男を招いて神楽を奉納した。この舞を奉納した上の平らな大きな石を舞台石と呼んでいる。そして甚内は二神山のふもとにある岩屋のなかにこもり、二十一日間の断食行をした。その岩屋は「行者岩屋」と呼ばれ、草深い山の斜面に大きな岩屋が残っている。

さて二十一日間の行を修めた甚内は二神に仕えようと「錠前」という岩屋のところへ行ったら、突然その岩戸が左右に開いて、眩しい明りが射し、雌雄の白鶏が高らかにときを告げた。そして中から見るも神々しい二柱の神が現れて、

「やよ甚内よ！汝は田夫の神となって、永く里人を守るべし」と神宣が下り、たちまち甚内の身体は丈高い石と化した。

行者沢の右手に立つ三角形の岩は、この時甚内の化身した「田の神石」であるという。

さて一方、そのとき身重だった甚内の妻は、二十一日の行が終わっても帰らない夫の身を案じて夫を探しに行ってみたところ、夫の姿は無く、その代わり今まで見たことのない大きな岩が立っていた。これを見て甚内の妻は、夫の化身した姿と気づき、夫の名を声限りに呼び悲しんでいたが、いつしかその妻の姿も石と化した。一〇〇メートルほどの所にある石を孕石（はらみ）といい、妊婦の姿のように見えるその石が、甚内の妻の石に変じた姿という。